

女子大学生の自己の顔に対する意識度と衣服選択の関係

西川 愛子
愛知学泉大学

Relation between Degree of Consciousness for Personal Face and Selection in Clothing on Female University Students

Aiko Nishikawa

キーワード：顔 face、衣服選択 selection in clothing、意識 consciousness

1. はじめに

私たちは他者と対面した時、まずその顔を見る。顔からその人物の性質や情動などを読み取り、その情報をもとにして人物を判断する。私たちは多数の顔を記憶することができ、さらに、一度記憶した顔を長い期間保持することができるため、こうした判断ができるのである。そして、そのことを経験的に理解しているので日常的に印象管理を行い、他者に好印象を与えられるように努めている。好印象を形成することができれば対人行動にも良い影響を与えることができ、場合によっては社会的な利益を生むこともある。巷でいわれる「第一印象が重要」といった考え方もあながち間違いではない。つまり、顔とは単に身体の一部であるというだけでなく、個人を識別するための部分であり、個人の印象を左右する重要な要素であるといえる。

衣服は身体に着装されることによって顔と組み合わせられ、顔とともにその人物をより明確に表現する役割をもつ。そのため、衣服には顔の印象をより良くみせる効果、あるいは、顔の印象を損なわない配慮が求められると考えられる。実際に、私たちは衣服を選択する際、鏡の前に立ってその衣服が自分に似合うかどうかを確認することが多い。その確認は体型や嗜好、流行、着用場面など様々な条件について、意識的に、あるいは無意識のうちに判断していると考えられる。自分の顔をより良くみせていると判断した衣服を着用した場合は積極的に行動することができるが、自分の顔

の気になる部分を強調すると感じた衣服を着用した場合は自信をもって行動することが難しくなることも少なくない。このように、衣服は顔と組み合わせられることによって人間の行動に影響を及ぼす力をもつようになると考えられる。

しかしながら、顔と衣服の関係についての研究は、柄原ら¹⁾による顔の形態と衿型の関係についての研究や、石原ら²⁾による顔と服装色の関係についての研究、佐藤ら³⁾による顔型とネックラインの形状や深さの関係についての研究、薩本ら⁴⁾による顔の印象が着装イメージに与える影響についての研究がみられたにすぎず、その重要性に比べて多くの研究が行われているとはいえない。

そこで、本研究では衣服と顔の関係を明らかにすることを目的に、女子大学生を対象とし、衣服を選択する際に顔を意識しているかどうか、衣服選択時に意識する項目はどのようなものか、自己の顔の各部位に対する意識はどのようなものかを検討したうえで、自己の顔に対する意識度と衣服選択の関係について検討を試みた。

2. 方法

(1) アンケート調査

2011年4月～7月に、女子大学生156名を対象に質問紙法による自記式アンケート調査を行った。無効票を除外した人数は143名(平均18.95歳、標準偏差1.01)

であった。

1) 自己の顔・体型・髪型に対する意識度

自己の顔、体型、髪型に対して「まったく意識しない (1)」「少し意識する (2)」「意識する (3)」「強く意識する (4)」「非常に強く意識する (5)」の 5 段階で評価させ、平均値を算出した。

2) 顔に関する衣服選択時の意識項目

顔に関する衣服選択時の意識について、「顔を意識して上衣の色を選ぶ」や「顔を意識して下衣の形を選ぶ」などの 12 項目に対し、あてはまる項目を全て選択させた。選択された項目は 1 点と換算した。なお、ダミー項目として「カジュアルな服装を好んで着用する」や「体型を意識して上衣と下衣の組み合わせを選ぶ」などの 52 項目を加えた。また、「上衣」、「下衣」の語意については事前に説明をした。

3) 自己の顔の各部位に対する意識度

自己の顔の各部位に対する意識について、「目の大きさ」、「鼻の高さ」、「肌のしわ」などの 28 項目に対し、「まったく意識しない (1)」「少し意識する (2)」「意識する (3)」「強く意識する (4)」「非常に強く意識する (5)」の 5 段階で評価させ、平均値を算出し、プロフィールを作成した。なお、この項目は先行研究⁵⁾および予備調査を参考に選出したものである。

(2) 分析方法

自己の顔の各部位に対する意識度について、SPSS 17.0 を使用し、主因子法による因子分析（プロマックス回転）を行った。また、下位尺度の内的整合性を検討するためクロンバックの α 係数を算出し、下位尺度間の相関を求めた。

次に、グループ内連結法によるクラスタ分析を行った。なお、各クラスタの人数比率の偏りについては χ^2 検定を行い、群間差については分散分析を行った。また、Tukey の HSD 法による多重比較を行った。

自己の顔の各部位に対する意識度と衣服選択時の意識項目の関係について、1 要因の分散分析を行った。

3. 結果と考察

(1) 自己の顔・体型・髪型に対する意識度

図 1 に自己の顔、体型、髪型に対する意識度を示す。最も意識されていたのは体型で、次いで顔が意識され

ていた。このことから体型ほどではないものの、女子大学生にとって顔は意識される要素であることがわかった。

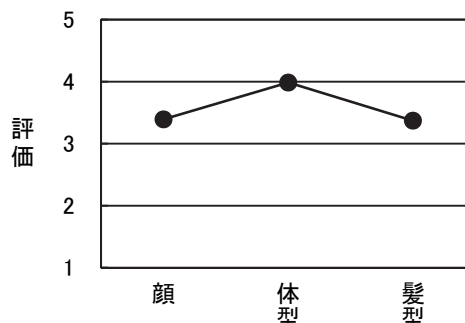


図 1 自己の顔・体型・髪型に対する意識度

(2) 顔に関する衣服選択時の意識項目

図 2 に顔に関する衣服選択時の意識項目を示す。この結果、「顔を意識して下衣を選ぶ」「顔を意識して上衣の色を選ぶ」「顔を意識して上衣の柄を選ぶ」に高い得点がみられた。一方、「顔から視線をそらすためのアクセサリ類を用いることが多い」や「顔を意識して上衣の素材を選ぶ」「顔を意識して下衣の形を選ぶ」の得点はそれほど高いものではなかった。

顔を意識して衣服を選ぶ場合、顔により近い位置にある上衣を意識することが多いのではないかと考えた。予想以上に「顔を意識して下衣を選ぶ」の項目に高い得点が得られた。これは自己の顔に対する意識がスカートスタイルかパンツスタイルかといった基本的な下衣スタイルの選択に大きく影響していることを示していると解釈された。

(3) 自己の顔の各部位に対する意識度

1) 自己の顔の各部位に対する意識度

図 3 に自己の顔の各部位に対する意識度のプロフィールを示す。この結果、全体に強く意識されているわけではないものの、「目の大きさ」「肌のつや」「眉の形」などは比較的「意識する」と評価された。一方、「耳の形」「目と目の間隔」「首の長さ」などは「あまり意識しない」と評価されていることがわかった。これらのことから、女子大学生は顔の各部位のうち、特定の部位を意識しているといえる。

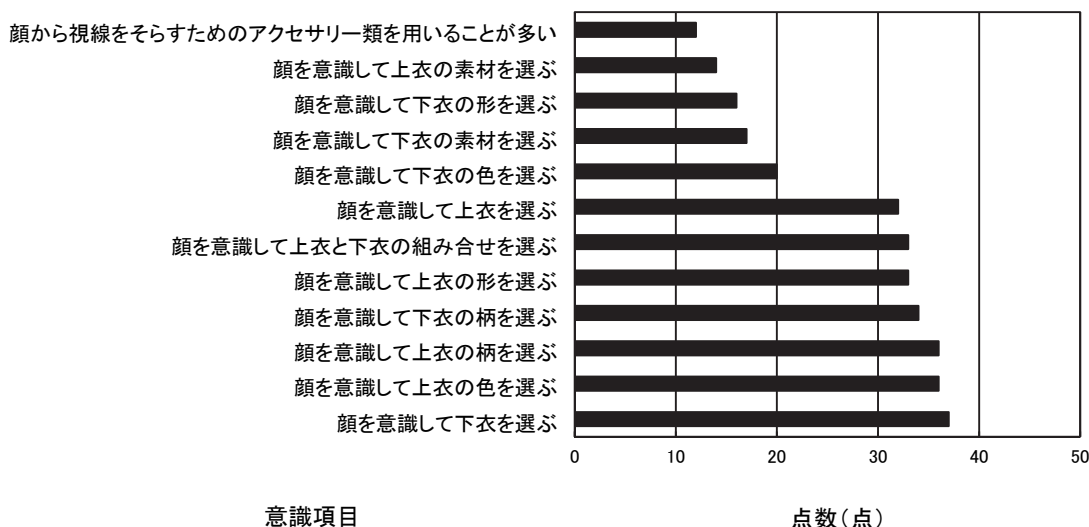


図2 顔に関する衣服選択時の意識項目

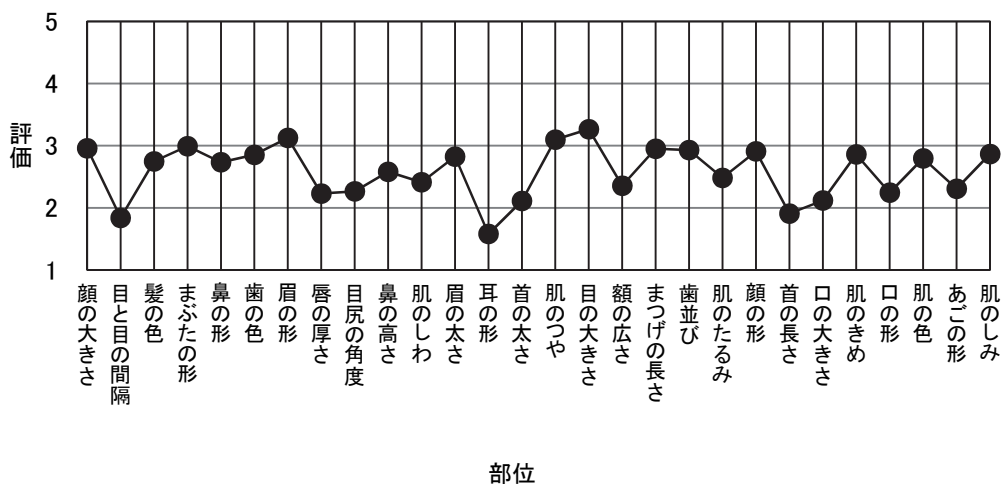


図3 自己の顔の各部位に対する意識度

2) 自己の顔の各部位に対する意識度の因子分析結果

自己の顔の各部位に対する意識度の評価に使用した28項目から、フロア効果がみられた6項目および十分な因子負荷量を示さなかった3項目を除外した19項目について因子分析を行った。この結果、第1因子から第3因子が抽出された。表1に意識度の因子分析結果を示す。

第1因子は10項目で構成されており、「肌のたるみ」

「肌のしわ」「肌のしみ」など肌に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「肌」因子と命名した。第2因子は4項目で構成されており、「目の大きさ」「まぶたの形」など目に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「目」因子と命名した。第3因子は5項目で構成されており、「眉の形」「眉の太さ」など眉に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「眉」因子と命名した。

表1 意識度の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

項目	第1因子	第2因子	第3因子
肌のたるみ	0.93	-0.11	-0.03
肌のしわ	0.77	-0.13	0.10
肌のしみ	0.76	-0.10	0.10
肌のきめ	0.73	0.30	-0.21
顔の形	0.70	0.13	-0.03
肌のつや	0.68	0.21	-0.04
顔の大きさ	0.58	0.18	0.07
歯並び	0.56	-0.11	0.28
口の形	0.47	0.30	0.06
あごの形	0.42	0.23	0.07
目の大きさ	0.26	0.92	-0.05
まぶたの形	-0.21	0.90	0.08
目尻の角度	0.29	0.60	-0.04
まつ毛の長さ	0.13	0.57	0.20
眉の形	-0.21	0.12	0.89
眉の太さ	0.18	-0.08	0.68
鼻の形	0.01	0.23	0.62
歯の色	0.40	-0.19	0.54
鼻の高さ	0.25	0.15	0.42
寄与率(%)	50.23	5.74	4.77
累積寄与率(%)	50.23	55.97	60.7

3) 下位尺度間の関連

意識度の下位尺度間相関を表2に示す。意識度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「肌」下位尺度得点、「目」下位尺度得点、「眉」下位尺度得点とした。次に、内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「肌」、「目」、「眉」のいずれも十分な値が得られた。3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

表2 意識度の下位尺度間相関

	肌	目	眉	平均	SD	α
肌	—	0.72**	0.72**	2.71	0.98	0.93
目		—	0.61**	2.87	1.19	0.89
眉			—	2.82	1.00	0.86

**p<.01

4) 意識度による分類

意識度の「肌」得点、「目」得点、「眉」得点を用いて、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行い、2つのクラスタを得た。第1クラスタには64名、第2クラスタには79名の調査対象者が含まれていた。 χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りはみられなかった。

得られた2つのクラスタを独立変数、「肌」「目」「眉」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「肌」は $F(1, 141) = 117.67$ 、「目」は $F(1, 141) = 331.97$ 、「眉」は $F(1, 141) = 86.58$ となり、いずれも $p < 0.001$ で有意な群間差がみられた。図4に2群の各得点を示す。なお、TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較を行ったところ、「肌」「目」「眉」のいずれも、第2クラスタ>第1クラスタという結果が得られた。

第1クラスタは「肌」「目」「眉」とも比較的低く、いずれの項目もそれほど意識していない傾向にあると考えられるため「低意識群」とした。第2クラスタは「肌」「目」「眉」とも比較的高く、いずれの項目も意識している傾向にあると考えられるため「高意識群」とした。

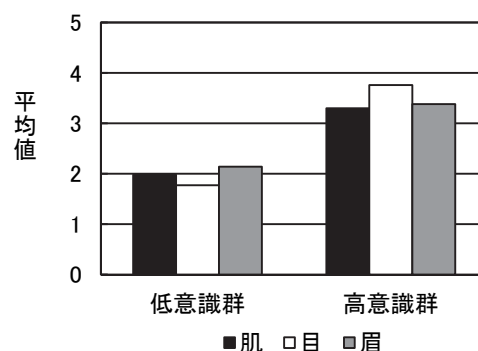


図4 2群の意識度得点

(4) 自己の顔の各部位に対する意識度と衣服選択時の意識項目の関係

意識度による分類で得られた2群の「衣服選択時の意識項目」の平均値を図5に示す。この結果から、「低意識群」は衣服選択時に顔をあまり意識していないが、「高意識群」は衣服選択時に顔を意識することが多いと考えられる。なお、分散分析の結果、有意な群間差が得られた。

次に、2つの意識群によって「衣服選択時の意識項目」の得点が異なるかどうかを検討するために、1要因の分散分析を行った。分散分析の結果、群間の得点差に有意差は認められなかった。

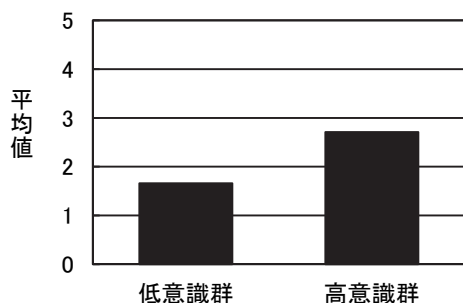


図5 2群の衣服選択の意識項目得点

4. おわりに

衣服選択と顔の関係を明らかにすることを目的に、女子大学生を対象とし、自己の顔・体型・髪型に対する意識、顔に関する衣服選択時の意識項目、自己の顔の各部位に対する意識度についてアンケート調査を行った。

その結果、女子大学生は自己の顔に対して少なからず意識をしていること、自己の顔への意識は衣服選択時の、特に下衣の選択や上衣の色や柄の選択に影響していることがわかった。また、自己の顔の肌、目、眉に対しては意識が高いグループと意識が低いグループとに分類され、さらに、顔に対する意識が高いグループは衣服選択時にも顔を意識することが多いと考えられた。

以上のことから、衣服デザインに顔をより良くみせるといふ視点を生かせば、これまで以上に高い有用性をもつ衣服をつくることのできるのではないかと考えられた。

謝辞

アンケート調査にご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 栃原きみえ, 杉浦れい子, 山田美都子: 顔面および頸の形態と被服構成における衿型との関係についての研究 (第1報), 名古屋女子大学紀要, 20, 71-80 (1974)
- 2) 石原久代, 栃原きみえ, 相山藤子: 着装者の顔面の形態的要素と服装色との関連性, 繊維製品消費科学, 26, 33-38 (1985)
- 3) 佐藤衛子, 近野智子, 高橋紀子: 顔型に似合う服飾要因に関する研究—顔型とネックライン、くりの深さのフィットネス効果について—, 日本服飾学会誌, 18, 177-184 (1999)
- 4) 薩本弥生, 手塚香代: 着用者の顔の印象が装着イメージに与える影響, 繊維製品消費科学, 46, 701-709 (2005)
- 5) 伊地知美知子, 小田巻淑子, 小林茂雄: 女子学生の身体に対する意識と着装の工夫—1992年と2006年の比較—, 家政学会誌, 61, 213-220 (2010)
- 6) 牛田聡子, 山内基子, 栢田庸: 身体像の評価に影響を及ぼす個人差要因—自尊心・独自性欲求—, 繊維製品消費科学, 41, 910-920 (2000)

参考文献

- 吉川左紀子, 益谷真, 中村真: 『顔と心 顔の心理学入門』, サイエンス社 (1993)
- 小林茂雄: 『装いの心理 服飾心理学へのプロムナード』, アイ・ケイコーポレーション (2007)